

宮町遺跡

—ドライブイン付き飲食店建設に伴う発掘調査報告 (MT2023-1)—

2023. 11. 30 富田林市教育員会

はじめに

ドライブイン付き飲食店の建設に伴う発掘調査である。調査地は栗ヶ池の西方、美原太子線と国道170号線（外環状線）の交差部分の南東側に位置する（図1）。宮町遺跡は平成15年に美原太子線の延伸工事に伴い発見された、古墳時代から中世までの遺跡である。平成28・29年度に大阪府教育委員会が行った調査では、中世以降の耕作溝のほか、地山面で古墳時代から古代にかけての集落や埋没古墳を確認している。

当申請地は遺跡外であったが、府調査地に隣接するため、同様な成果が想定された。令和4年12



図1 調査位置図

月に試掘調査依頼書の提出を受け、令和5年1月に申請地の3箇所を試掘調査を行ったところ、遺構・遺物を確認した（図1・4）。そのため、協議の結果、申請地全体を宮町遺跡の範囲に拡大し、遺構密度の高い東側を中心に浄化槽及び建物部分で本調査を行うこととなった。調査期間は令和5年5月9日～6月8日までの実働19日間で、調査面積は324㎡である。

調査成果

基本層序（図2）は府教委の調査や試掘調査と基本的に相違ない。最近の盛土と現代耕土・床土の下は灰黄～灰黄色砂質土（包含層1）と暗灰黄～黄褐色シルト（包含層2）、調査区北東部に広がる0.1m厚の褐～暗褐色砂礫混じり粘質土である。その下は明黄褐色粘質土の地山で、南東部ではやや粘性を帯びた黄褐色砂礫土となる。

機械掘削は約GL-0.4mまで実施し、第1面を検出した。第1面は包含層2上面にあたり、中世以降の耕作溝を多数確認した。その大半は東西方向で、僅かに南北方向もみられる。埋土は灰黄色砂質土である。府調査ではY-36215より西側での検出であったが、今回の調査ではそれより東側でも検出した。ただ、地山が礫層となり、微高地状になる調査区南東部（試掘Tr②周辺）では確認できなかった。

第2面は地山面で検出した（図4）。後世の削平を強く受け、遺構そのものの残りが非常に悪い。調査区北半の地山直上には褐～暗褐色砂礫混じり粘質土が薄く堆積していたが、明瞭でなかったため、遺構検出に伴い掘削した。本来の地山面はこの層の直上であった可能性が高い。

ビットは55基検出した。径は0.2～0.6mを測

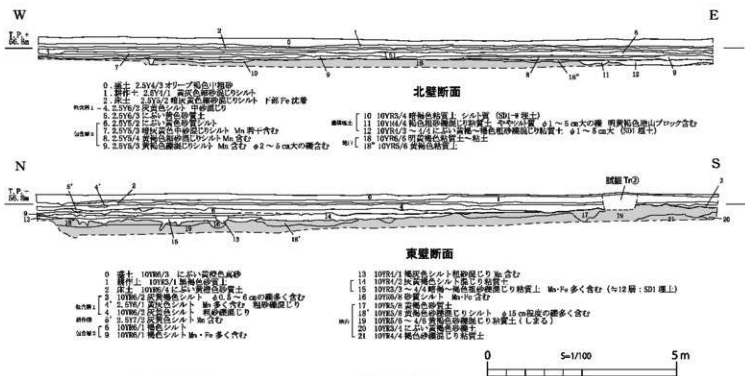


図2 北壁・東壁断面図

る。そのほとんどが深さ0.1m以下で、かろうじて残存している状況である。埋土は褐灰〜黄灰色砂礫混じり粘質土のもの、黒褐色粘質土のもの、黒褐色粘質土に明黄褐色砂岩質ブロックが混じるものがみられた。僅かではあるが柱底のみられるものがあった。時期は古代以前に属すると思われるが、遺物はなく不明である。

調査区南西部では不定形土坑(SK19)を確認した。最大長4.4m、最大幅4.3m、最深部で0.7mを測り、底部形状も安定しない。風倒木痕と思われる。

調査区北北部では不定形だが弧状に巡る溝(SD1、SD1-W)を確認した。溝は幅4.5m前後、深さ0.15mを測り、埋土は暗褐色粘質土である。南西部で一旦途切れ北壁端に続く。溝より内側(土山)で、調査区北側に向かっ

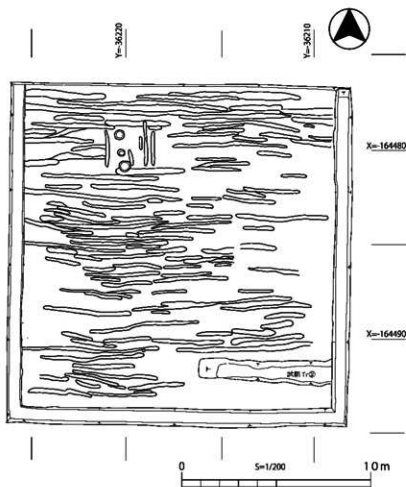


図3 第1面平面図

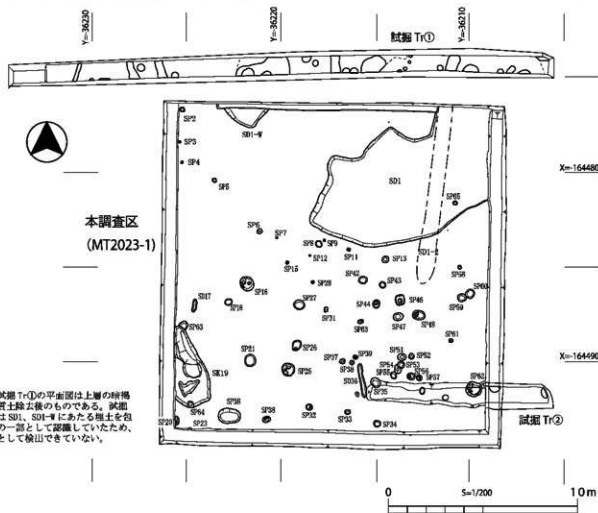
で僅かに高くなっている。残存状況が悪く推察にすぎないが、北側部分の高まりを墳丘とする埋没古墳の存在の可能性を示しておきたい。

また、SD1埋土内の断面上で、重複する幅0.8m、深さ0.1m程の、部分的にやや明るい褐色粘質土に明黄褐色の地山粘土ブロックを含む溝を確認した。溝はSD1より南側に延びるが、堆積が非常に薄く、窪みに溜っただけなのか、試掘Tr①から続く溝なのか平面上で判断できなかった。そのため調査では遺構としなかったが、北壁断面(11層)や試掘Tr①での状況を踏まえ、その範囲を図4にSDI-2として示しておく。

出土遺物はコンテナ1箱を数える。土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、中国製青磁と白磁、近世陶磁器、瓦、石器類が出土した。土器はいずれも小片で、26点を図化した(図5)。

遺構出土遺物は、SD1からの布留式と思われる古式土師器甕の口縁小片(25)とサヌカイト製の剥片のみである。

そのほかの出土遺物は包含層からで、古代末～中世を主体とする。1は瓦器皿で見込にジグザク状の暗文がみられる。2～7は瓦器塊で13世紀の所産。2・3は内面、5は内外面に暗文がみられる。8は瓦質土器鍋、9は瓦質土器羽釜である。10は中国製白磁で、外面を6面か8面に面取りする15～16世紀後半のもの。11は黒色土器B類塊で、10世紀後半～11世紀の所産か。図化できなかったが、黒色土器はA類も出土している。12は土師器塊、13～18は土師器皿。13は「て」の字状口縁をもち、10世紀後半～11世紀に属する。15はへそ皿傾向がみられる。19～21は土師質土器羽釜で、19はミニチュア品。22は東播系須恵器埴鉢。



※ 試掘Tr①の平面図は上層の暗褐色粘質土除去後のものである。試掘時にはSD1、SD1-1にあたる埋土を包含層の一部として認識していたため、遺構として検出できていない。

図4 第2面及び試掘Tr①・②平面合成図

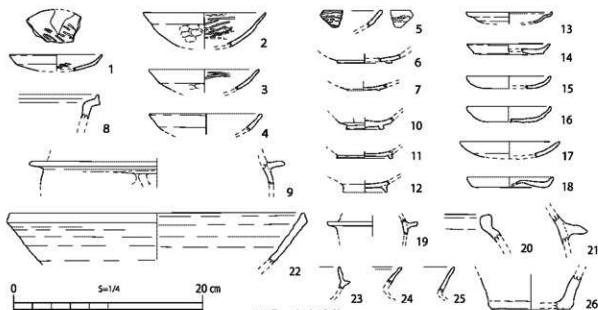


図5 出土遺物

23は古墳時代の須恵器坏身。24は布留式後半の古式土師器甕口縁の小片。26は弥生土器と思われる底部である。このほか、古墳時代後期後半～奈良時代の遺物も一定数出土し、須恵器には天井部にヘラ記号のある坏壺小片もみられた。

石器類はササカイト製の石核や剥片のほか尖頭器とみられる石器を1点確認している。

まとめ

今回の調査では上面では中世以降の耕作溝を検出し、地山面では、強い削平を受け遺構の残りが悪かったものの、多くのピットや埋没古墳の可能性を含む遺構を確認した。

当調査地の原地形は、東側の粟ヶ池に向かって北東～南西方向に緩層ベースの高まりがあり、そ

こに向かって粘土層が堆積し、微高地を形成する。その微高地上に集落や古墳は立地する。微高地の西側は徐々に低くなり、外環状線の下を谷底とする小さな開析谷がある。調査地南東部では府調査地点から続く礫層が広がり、遺構は希薄になるが、既往の調査から粟ヶ池側に落ちる谷の肩際まで集落が広がることわかっている。古代以降中世までの間に行われた新田開発で当地周辺は削平整地され、中世以降は現代まで耕作地として利用されてきた。今回の調査地が府調査地に比べ削平を強く受け、古代以前の遺構の残りが悪いことも、北に向かって下がる原地形に起因することは容易に窺えよう。

参考文献 大阪府教育委員会「2019年度」大阪府埋蔵文化財調査報告書 2018 1

報告書抄録

ふりがな	みやちょういせき		副番名	ドライブイン付き飲食店建設に伴う発掘調査 (W2023-1)				
書名	宮町遺跡		シリーズ名・番号	富田林市文化財調査報告82				
編集機関	富田林市教育委員会		編纂者名	西村 雅実				
所在地	〒594-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号							
発行年月日	2023(令和5)年11月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みやちょういせき 宮町遺跡	とんだばやし みやちょういせき 富田林市 宮町一丁目	27214	186	34° 31' 01"	135° 36' 20"	20230509 ～ 20230608	321㎡	記録保存調査 ドライブイン付き 飲食店建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮町遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安・中世	ピット、溝、土坑	瓦器・土師器・須恵器(9種)				

印刷 明報社